

## ディアスポラとしての華人

著者	陳 天璽
ページ	305-320
発行年	2005-07-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5256">http://hdl.handle.net/10502/5256</a>

## 2

## ディアスポラとしての華人

会館／蛇頭

ディアスポラとは

ディアスポラ(diaspora)は、広辞苑において、「離散」、または「パレスチナから他の世界に離散したユダヤ人」を意味すると記されている。一方、英和辞典では、「離散したユダヤ人」「離散したユダヤ人の住んでいた土地」「父祖の地から遠く離れた地に居住する人びと」と解釈されている。元来、ディアスポラという言葉は、ユダヤ人の離散を意味するものとして使われてきた。しかし、民族問題が再燃し、またグローバル化により人の移動が頻繁化するようになった近年において、この言葉は、ユダヤ人だけではなく、ほかの民族にも使われるようになっていく。

ディアスポラはギリシア語の「広める、撒く、散らす」という動詞 *speiro* と前置詞 *dia* に由来する。ギリシア語で、これを人に用いる場合、「移住」や「植民地化」という意味をあらわしたが、ユダヤ人、アフリカ人、アルメニア人たちにとって、ディアスポラという語はギリシア語の移住という意味よりも、

むしろ残忍で不吉なイメージを含んでいた。それは、国外追放され、故郷や祖国の外で生活し、帰りたいた所に帰れないという精神的な外傷を共有した集団を指した。しかし、近年では、こうした暗く悲しいイメージとは違ったかたちで使われている。国外追放や迫害を受けていなくとも、世界各国に散らばって暮し、強い集団的アイデンティティをもちつづけてきた人びとをディアスポラと指すようになってきているのだ[Cohen 1997:ix-xii]。例えば、「フィリピーノ・ディアスポラ」や「チャイニーズ・ディアスポラ」などがあるが、こうした場合は、かつてユダヤ人などに使われる際に込められていた悲哀や感傷的な意味合いは含まれていない。

さらに、グローバル化の進展、そしてメディアや情報技術の発展により、ディアスポラはある種、コスモポリタンのような前衛的なライフスタイルや世界観をもった人びとのようにもみられている。ディアスポラは、移住した地に完全に帰属することもできず、一方、美化された仮想の故郷に帰ることを志向するのであるが、そこにもじつは自分の居場所がないのである。二重の不可能性、非現実性をディアスポラの人びとは生きていることが多い。

#### ディアスポラと華僑・華人

近年、世界に約三〇〇〇万人散在しているといわれる華僑・華人（かきょう・かじん）に対しても、ディアスポラという用語が使われるようになってきている。ディアスポラは中国語で「離散」と訳されている。華僑・華人の移民史に精通している王賡武（ワン・カンウ）は、ユダヤ人に使われてきたディアスポラという用語を華僑・華人にあてはめることに抵抗を示す。そのうえで、華僑・華人が散在している状態(diasporic)を研究することは、時代趨勢か

らも大変重要な視点であることを認めている [Wang 1999:1-17]。

華僑・華人の海外への移住は、多くの場合、追放されて出ていくのではなく、より良い生活を求めて自ら選択した結果である。つまり、華僑・華人の移民現象は受動的ではなく能動的な分散である。また「離散」といった場合、それは離れて散らばるといふ遠心力が主となるが、共通のアイデンティティによって繋がるという求心力をもっているため、中国語の場合は「離散」ではなく「聚散」などのように、集まる意味合いも含めた表現がよいだろうとの意見がある。また、華僑・華人は移動を続け、例えば、移民先である香港やマレーシアなどから、またカナダやオーストラリアなどへ再移民するなど、最終目的地がなのまま遷移する傾向もあるため「漂泊」とあらわすことも適しているとも考えられている。

なお、ここでは華僑・華人をディアスポラであらわしているが、悲哀なイメージとは切り離し、純粋に民族が世界各地に点在している現象を指している。また、民族が故郷における内乱や貧困から脱出するため、より良い生活を求めてさまざまな地域に押し出され分散するという「プッシュの力学」とともに、共通のアイデンティティによって組織やネットワークを築く求心力である「プルの力学」をもった集団であると認識している。

#### 華僑・華人の定義と人口

中国国外に居住する中国系の人びとは華僑、華人などと呼ばれている。厳密に区別し定義した場合、華僑とは依然として中華人民共和国や中華民国の国籍をもつ者、つまり法律上「中国人」でありながら、中国国外に生活基盤がある人びとを指し、一方、華人とは、すでに外国国籍を取得した者を指している。ほ

かにも、中国系を意味する用語は華裔、華族などいろいろあるが、ここでは、もつとも一般的に使われている華僑・華人、もしくは華人を使用する。

華僑・華人は流動性が高いため、彼らの人口を把握することは難しい。統計によっても異なるが、全世界に約三〇〇〇万人の華僑・華人が存在しているといわれている。そのうち約八割は東南アジアに居住しており、そのほか、北米に約二〇〇万〜三〇〇万人、南米に一〇〇万人、ヨーロッパに八〇万人、オセアニアに四〇〇万人、そしてアフリカに十数万の華僑・華人が居住していると推定されている。また、華僑・華人の意識や立場もひとくくりにはできないものではない。彼らは居住している地域、そして居住国社会によって、経験した歴史も極めて多様である。

シンガポールにおいては人口の八割が華人であり、彼らは政治経済の中枢に存在している。しかし、シンガポール以外の国々では、華人はエスニック・マイノリティとしての立場を有している。他国に比べ、国の全人口に対する華人の人口比率が高いマレーシアでも、華人は全人口の三割ほどである。彼らは、マレー人優位政策により公的・政治的な舞台での活動は制限されているが、一方で、名前、学校、政党、テレビやラジオ、新聞など、華人としての特性や文化を保持することを認められており、中国系の要素が色濃く残っている。

隣国インドネシアは華人人口が五〇〇万〜六〇〇万人いるといわれ、世界最大の華人人口をかかえた国である。華人は絶対数からみると多いが、全人口比率としては、四％に満たない少数派である。一説には、マイノリティである華人が、インドネシア経済の八割を牛耳っているといわれている(朱 1995:3-531)。スハルト時代、華人は政治・文化など各活動が制限され、中国語や華人名の使用も禁止されていたが、経済活

動の場では自由を与えられた。スハルト政権崩壊後、インドネシアにおける華人社会も大きく変わり、華人の文化活動や政治参加なども近年はだいぶ自由化され始めている。

東南アジアの華僑・華人は、十九世紀末や二十世紀初頭など、比較的早い時期に移民した者が多い。第二次世界大戦後、一九四九年に新中国が成立し共産党政権のもと、諸外国との交流はしばらく制限された。その時期から、東南アジアの旧植民地が独立する七〇年代頃までのあいだ、東南アジアへ中国系移民が継続的に流入することは少なく、むしろ断絶していた。一方、アメリカやカナダ、日本などへは、戦前に続き戦後も中国系の移民が絶えることはなかった。その大半は、中国本土からではなく、香港や台湾から移民した者である。多くは留学をへて就職し、その後、現地に生活基盤を築き、華僑・華人となっていた。こうした人びとは、「新移民」と呼ばれ、多くは高等教育を受けたエリート層であり、先進諸国への移住をめざした。

その後、また移民の大きな潮流がある。それは一九八〇年代以降、中国の改革開放によって、中国本土から流出した人びとである。彼らは「新華僑」と呼ばれている。人口の面でも、目的地の面でも、規模が大きく目を見張るものがある。彼らは、新中国成立後、中国に生まれ育ち教育を受けるなど、近代国家としてのシステムを有した中国での生活を経験している。よって彼らは、早期に移住した「老華僑」とは、ナショナルリズムやアイデンティティなど、意識的な面で差異がある。その一例は、結社のあり方や組織活動から垣間見ることが出来る。老華僑が移民した時代、政府機関や大使館など、「国民」として頼ることができる組織はまだ機能していなかった。そのため、彼らは出身地や同族関係の繋がりを利用し相互補助組織をつくることで、権益の保護や要求、その他のニーズを満たした。一方、現代に生きる新華僑たちは、

中国大使館など公的機関によって、一定のサービスや情報を提供されている。そのため、彼らが結社や組織を必要とするのは、日常的な需要というよりも、非公式な場で目的を達成するためである。また、老華僑がおもに依存した同郷会や宗親会などは、新華僑にはあまり重要視されておらず、むしろ、学縁や業縁組織のように、同じ出身校であるとか、同じ専門業種であるなどの理由から結成されている組織が増え、求心力を強めている。

#### 華人ディアスポラの発生と仕組み

アヘン戦争を境に、大量の中国人が海外に流出し、華人ディアスポラを発生させた背景には、中国内部の経済的・社会的貧困というプッシュ要因と、欧米諸国の奴隷制廃止と西洋列強の植民地における労働力の需要というプル要因があった。この頃の中国(清朝政府)では、一八四二年の南京条約の結果として広州、廈門、福州、寧波、上海の五港で貿易がおこなわれ、西洋の人びとは、これらの地で企業を設立し、ビジネスを拡大するだけでなく、労働力の販売もおこなっていた。西洋宗主国の指導者たちは、東南アジアの植民地に到着したあと、現地の資源開拓のため大量の労働力を必要とした。その需要に応えたのがインドと中国であった。

同時期、アメリカ、カナダ、ラテンアメリカなどでは工業化が進められ、金鉱採掘や鉄道・道路建設など近代工業化建設のため、廉価で勤勉な労働力が必要であった。その労働力の供給源になったのも中国であり、送られた労働力は「苦力」(クーリー)などと呼ばれた。こうした労働力の売買は組織的におこなわれ、「苦力貿易」ともいわれている。このようにして、組織的に華人は世界各地に広がっていきディアス

ポラの原型が成立するのであった。

この頃、華人を取り巻く社会は混乱していた。華人社会に、ある種の秩序をもたらしたのが秘密結社であった。中国国内は政治でも経済でもすべてが無秩序であり、そのようななかで、移民の運搬、職探し、宿屋、各種書類作りなどを結社に依頼することが多かった。とくに、需要が高かった労働力については、「客頭クワトウ」というブローカーに頼る面が多かった。客頭は、出稼ぎ志望者を集め、「客棧クワチヤン」という宿屋に入れ、外国帆船の船長と結託し、需要に応じて労働者を海外へ送り込み、目的地に着いたあとは、現地の代理業者がそれぞれの出稼ぎ労働者を雇用主に送った。その際、それぞれの労働者は、船賃など諸経費を前借するかわりに労働契約をかわした。こうした秘密結社のネットワークがなければ、有効な移住も就職も定住も望めなかったのが実情である。とくに、十七世紀から十九世紀において、結社のはたした役割は大きかった。

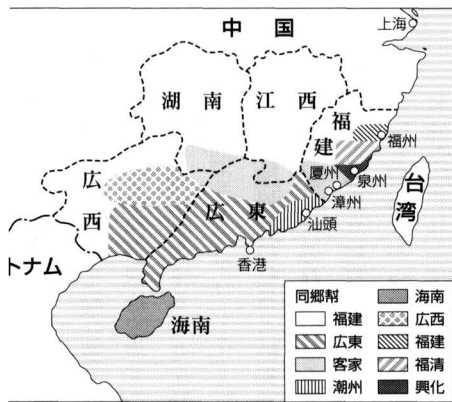
また、各地に送られた華人は労働者が主だったため、その男たちのための売春婦が中国南部から運ばれてきた。数は少ないにせよ、この商売は運送も宿屋も、秘密結社の支部である「堂会クワンフエイ」の仕事であった。このほか、秘密結社は、華人社会でのめごと、他からの攻撃、そして、故郷に残した家族と移住者のやりとり、病気や葬式など華僑・華人に関することは何でも対処した。結社は方言に従って分派ができ、分派ごとに頭目のもとに団結して、入札でも勢力争いでも自分たちの利害を最大限に手に入れようとした。勢力を増し団結を促すため、各小派は祭神を祀る。よって、華人のいる町で祀られている結社の寺廟と分布をたどると、方言ごとの勢力配置がわかってくるのである〔斯波 1985:154-160〕。



## 華人ディアスポラが結成した組織や団体

華人によって結成されてきた団体は、地縁、血縁、業縁、芸能文化や体育、宗教に基づくものである。これらの団体は複雑に入り組んでおり簡単に区別できるものではないが、大まかには以上のように分類されている。とくに主要なものは、会館、公所と呼ばれるもので、原籍地(出身地)と宗族(血縁や姓氏)をもとに設立された団体である。

一家、一族そして郷里の成員証明がなければ、故郷以外の「外界」では信用されない。これを補強するのが同郷のコネであった。村から町、小都会、大都会へと繋がるネットワークがあれば、出稼ぎ人にとつ



て「外界」は開けたシステムの網の目として映る。これは海外に関しても同じであった。同郷の絆とは、つまり、人・もの・情報・サービスの流れの網の目を繋ぐ結節の繋がりである。

会館は、中国国内や国外の都市にあって、同郷の人たちが情報交換、相互扶助、親睦のために組織する団体のことであり、また集会所などとして同郷者の拠点となる建物のことである。大別すると会館には二つの種類がある。一つは父権制をベースにし、同じ祖先をもつ同姓や同族として結成された血縁団体である。もう一つは、同じ原籍地の地縁関係や出身地の繋がりをもとに結成された地縁団体である。当初、会館は幫とも呼ばれていた。代表的なものでは、広東（広州、その他珠江デルタ出身者）、潮州（広東省東部）、福建（廈門を中心とする福建南部出身者）、客家（中国北方から華南に移住した者）、海南（海南島出身者）などである。

はじめは、十六世紀から中国で都市間の商業が日常化するにつれて生じた同郷をベースとする商工業のギルドを指した。原籍地を離れて遠方に出稼ぎに出ることが頻繁になるといふ社会事情のもと、外国にいる同じ出身地の人たちは、言葉や生活習慣を共有しているため、関係を築きやすく、また商売をするうえでは相互協力することによって外部の圧力に対抗しえた。

同郷の官僚と商人が会合をもつときなどに会館を集会所にすることも多く、また、原籍に基づき受験させる科挙制度が確立し、地方出身の官吏や学者の科挙受験や任地への旅の際、会館の宿泊施設に寄宿し、拠点にすることができた。同郷の子弟の教育や科挙受験者のためにも、会館の一角を教育施設にすることがあった。山西、徽州、広東、福建など各幫は、中国各地にそれぞれ会館を有した。

十九世紀頃、東南アジアでも華僑・華人が増えるのにもなつて、かつて中国国内にあった会館や公所

が結成されるようになり、福建や広東系のものが多数設立された。二十世紀になって各都市別に総商会（近代的商工会議所）に整理されていくが、団体形成の原点はおもにこうした同郷ごとの各県単位の結末であつた。

海外に設置された会館は、華人が移住した地において必要な援助や情報を提供した。また、華人が移住地において他界した場合、死体の処理や死者が無事に葬られることを手伝つた。かつて華僑・華人は落地帰根きこんといつて、移住してもいずれは故郷に帰ることを願つた。よつて、移住地で他界した人は、棺におさめられたのち、船で故郷に送られることがあつた。それは運棺といわれ、各移住地と故郷のあいだにはネットワークが成立しており、それは同郷会や会館など地縁によつて繋がつていた〔帆刈 1986:75-110〕。また、のちに移住地に根を生やす華僑・華人が増え、死者が移住地に埋められることが一般的になると、財力があり規模の大きな会館は、共同墓地を所有し、同郷者が他界後も伝統や風習にのつとつて埋葬され安らかに眠り、子孫代々に奉られるようにしている。

会館の設立は、華人に社会的サービスを提供し、そして、中華民族としての文化的儀礼を体現したり、保存することを可能にした。また、外部のものとの競争や脅威に対し、ともに対抗し、会館は彼らに政治とビジネス活動のチャンスを与えた。

移民が増加するに従つて、華人社会も複雑化し、会館もより細分化されるようになった。会館のほかに、華人たちは行会も設立した。行とは郷里を同一にする特定の業種のネットワークを指す。例えば、南北行は、北と南の産品をやりとりすることから名づけられた行会であり、扱われる商品としては米や海産物が多い。香港の上環やシンガポールのノースカーネル通りに行くと、米や海産物の問屋が並んでいるが、お

もに潮州系が仕入れや卸を握っており、しかも流通ネットワークをたどるとタイ、マレーシア、シンガポール、香港などどこに行っても、潮州系の人脈がはりめぐらされていることがわかる。

兄弟会というものもある。これは俗にいう秘密結社として存在する一方、武術団体や芸能組織でもあり、例えば、祭事の際におこなわれる獅子舞などは、こうした組織がおこなう。別章(第2章第1節)に言及されているのでここでは詳しく述べないが、洪門会はこうした団体の代表例である。

十九世紀から二十世紀の初め、新しい団体が設立された。中華会館や中華総会といわれ、華人の各組織をまとめる傘型組織としての機能を有したものである。こうした組織は、華人社会内部においてはリーダー的存在となり、また外部社会に対しては華人社会の代表的存在となった。中華会館や中華総会は、居住地において華人の政治的代弁者となっただけでなく、華人の経済発展、福利も促進した。とくに学校設立などにおいては多大な役割をはたしている。

#### 拡がる華僑・華人ネットワーク

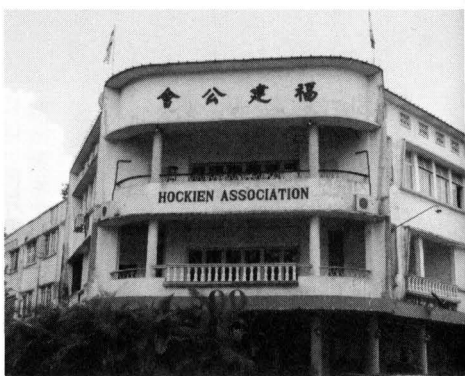
第二次世界大戦後、国際環境の構図は国をベースに描かれる。国々は自国建設に集中し、人びとのアイデンティティも国家によって決定されていた。また、中国国内の政治的分裂により、華人社会内部でもイデオロギーの争いの影響を受け、元来比較的統一され組織力をもっていた会館、公所などの団体は力を弱め、また居住国の規制により華人組織は衰えていった。

しかし、一九八〇年代にはいると、国際情勢の緊迫した状況が緩和されるようになる。また中国の改革開放政策、それに続くグローバル化の影響を受け、華人組織も再構築され、地元の活動だけではなく、国

際会議などをおこない活発化する。今日、会館は多角的な役割をはたすようになっており、今までのように同郷者の連絡・交流の拠点であると同時に、同郷者に故郷の情報を提供したり、同郷者のネットワークにかかわる情報の編集・公開をする機能が重視されてきている。

華人組織は、一九九八年において、その総数は九五〇〇にのぼるといわれ「蔡 Tsoo-jin」と、とくに、近年結成された組織の理念や目的は共通しており、それは中華文化伝統の発揚、各地の経済・文化の交流である。近年、世界各地の華人社会において、地縁・血縁組織の国際的な大会が多数開かれている。同郷会は、居住地において不自由な状況に直面したとき、同じ方言を話す同郷者同士で相互扶助しようという目的で設立したのであるが、そうした繋がりをグローバルに拡大しようという動きがでてきている。一九九〇年代にはいり、そうした活動は急速に増加した。世界福州同郷会が九一年に第一回大会をシンガポールで開き、また九二年には世界客家人大会もシンガポールで開催され、同年パリでは、世界潮州人大会が開かれた。こうした大会は、毎年各地の会館などが持回りで主催し、そのつど各国からメンバーが集まり、親睦交流のほか、ビジネス情報の交換、共同事業の相談などを行っている。とくに近年は中国への慈善や投資事業計画などが多い。各組織はそれぞれ世界的な活動をおこなっており、なかでも最大の経済力をもっているといわれる潮州人のネットワークは注目を集めている。九七年十一月、第九回世界潮州人大会が潮州で開催され、世界二十カ国・地域から三〇〇〇人を召集した。自国民に潮州出身者がいるため、カナダの首相、フランスの大統領などからも大会に祝電が送られ、潮州人の居住地での活躍はもちろん、彼らの勢力を世界が重視している様子がうかがえた。

血縁組織である宗親会も同じように活発な活動をおこなっている。一九九一年にはバンコクで鍾しよ氏の



マレーシア・サラワク州クチンの福建公会

大会である第五回世界鐘姓聯宗大会が開かれ、同年十一月にはクアラルンプールで第七回世界謝氏宗親總會が開催された。「聯宗」「總會」などはどれも、各地で独立していた会館や宗親会を連合させたものである。陳氏宗親会も毎年アジアを中心に世界大会をおこなっており、九三年にバンコクで開かれた世界大会では一〇〇〇人近くの参加者を集めた。さらに九四年には舜裔宗親聯誼会と名称を変えて、マニラにおいて世界大会がおこなわれた。「舜裔」と名称が変えられることによって陳氏のみではなく、中国古代の帝国、堯の皇帝舜の末裔と考えられる陳氏を含む胡、袁、姚、虞、田、王、車、陸、孫など一〇の姓の者が合同で大会をおこなうのである。彼らは、共同の祖先であるという舜帝を祀る儀礼をおこない、交流を深め、友誼を構築する。かなりの年代を遡る時代の先祖を共有しているであろうという事で世界各地か

ら毎回一〇〇〇人近くの華僑・華人を集めるのである。

こうした点から、華僑・華人は血縁とはいっても生物学的なものではなく、その連帯は文化的な共感によって成立した曖昧あいまいなものであることがわかる。同時に、それはディアスポラとしての共感であつたりする。つまり、血縁は一般的に排他性を有した絶対的な繋がりを指すが、華僑・華人のもとでは、血縁でさえも柔軟化し、可変的であるといえよう。そして、連合することによって、より多くの力を集結できるところを彼らは知っており、それはディアスポラやマイノリティとして身につけた生活の知恵である。

血縁、地縁だけでなく業縁組織も、国際的な大会を開いている。もつとも代表的なものは世界華商大会であり、シンガポール前首相リー・クアンユーの旗揚げの基礎となつたことでも知られている。この大会には、世界の大物華商たちが集まることで注目され、華人のビジネス・ネットワークの代表ともなつた。

#### 蛇頭による華人のディアスポラ

近年、華人のディアスポラが、目まぐるしいスピードと規模で拡がっている。そのなかでも、とくに蛇頭じゅうの動きは目を引くものがある。蛇頭は、中国から海外への密航者を不法斡旋する中国人ブローカーを意味し、英語でスネークヘッドとも呼ばれている。蛇頭は各地のマフィアと組んで、おもに福建方面から職を求める非合法の出稼ぎ人を運んでいる。これは先に述べた、十九世紀の移民ラッシュ、つまり、「客頭」のようなエージェントが出稼ぎを送り出していた状況と極めて類似しているように思う。明、清の頃、福建や広東の人は同族、同郷が集団でアジアやアメリカに出稼ぎに出た。港から出航する出稼ぎ者たちは出発時に客頭といわれるブローカーとのあいだで労働契約をかわすかわりに船賃を前借したそうだが、この

客頭こそ現代の蛇頭のルーツである。森田によれば、現代の蛇頭は単一組織ではなく、指揮系統が異なる組織が協力し合い、競い合ってビジネスを成立させる。蛇頭は大きく分けて三つの仕事を分担する。地元で密航者を募る「勧誘蛇頭」、そして人蛇(密航者)に付き添って目的地まで運ぶ「付添い蛇頭」、さらに目的地で密航者を受け入れる「出迎え蛇頭」、これら一本のパイプラインが形成してはじめて蛇頭というシステムが成立する。現代では労働契約書のかわりに密航者とのあいだに「密航協議書」を取り交わす。密航費用は、目的地についてから支払う成功報酬である[森田 2001:13-14]。

なお、二〇〇四年五月、筆者がニューヨークを訪問した際、蛇頭を経由して出稼ぎにきたという福建人と話す機会があった。彼によると、現在、密航費用の相場は七万ドルであるという。これは、四年前に人蛇が渡米する際の相場であった三万五〇〇〇ドルの約二倍にあたる。ちなみに当時、日本へも約三万ドル、ヨーロッパへは二万ドルを要した。人によつては密航の途中で捕まったり、事故死するなど危険は多い。彼によると、無事目的地に着いてからも、仕事は重労働が主であり、朝から晩まで働きづめで賃金も安く、まさに現代版苦力といえる。はじめの四、五年の賃金はもっぱら返済にあてられ、その後ようやく、故郷の家族に送金できるそうだ。また、密航ルートもさまざまであり、かつては船による条件の劣悪なものが多かったが、今では飛行機でファーストクラスに乗り、高官待遇を受けて国境をすり抜けることもあるそうだ。また、蛇頭は必ずしも中国系で組織されているとは限らず、外国人も含まれており、その人たちは中国人でないにもかかわらず、簡単な福建語を話すそうだ。こうした組織や人のネットワークからも、華人ディアスポラを創出し、関わりをもっている者は多種多様であるのがわかる。



## ディアスポラとしての華人の可能性

これまで、華僑・華人の結社は、地縁、血縁などを基に成り立ってきた。それゆえ、一般的には、排他性の高いネットワークだとみられている。また、華僑・華人たちの意識は、ディアスポラした時点からの時間の流れのなかで、それぞれのバックグラウンドやアイデンティティを多様化させている。これにともなって、華僑・華人の組織のあり方も変容している。

その一方で、彼らは、ディアスポラに基づく一定の共通認識をもつ。それは、これまでの国家を基本とした世界観とは異なり、さまざまな他者との交流の結果得た多文化主義やハイブリディティを前提とする共通認識である。

同時に移住地での他コミュニティとの接触をとおして、華人ディアスポラたちは、華人以外の結社や組織とも深くかわり、地域に根ざしたコミュニティの主要なプレーヤーとしての機能をはたしているケースも多くみられる。

このように、ディアスポラとしての華人は、同一性に基づくナショナル・アイデンティティの排他性を乗り越え、新たなアイデンティティのあり方を模索するための多元的な視点を形成する契機や、創造的なエネルギーを生み出していくための可能性を有している。

陳 天璽